

地域とともにある

勢いのある学校

No. 27 (R2. 11. 26発行) 文責 校長 福田雅也

高き志【こころざし】

名前は、一番短いラブレター

「名前は、一番短いラブレター」…これは、ある文具メーカーのCMに出てくる言葉です。心に残っていたCMなので、今回この学校便りを書くにあたってネットで検索して見直してみました。そのCMは、母親が自分の息子の名前「佐藤大輔(さとうだいすけ)」をいろいろなものに記す場面が映し出されます。それは、母子手帳からはじまり、かみおむつ、ランドセル、病院での問診票、合格祈願絵馬など。そして大学生となった一人暮らしの息子への荷物送り状とつながります。最後は息子がその荷物を受け取るシーンとなるのです。心温まるもので、母親の深い愛情が短い時間で見事に表されていたので印象深く覚えていたのです。ネット上で30秒と1分の両バージョンを見ることができるので、興味がある方はご覧ください。少しの時間で心温まると思います。

このCMを改めて見ながら思ったことがあります。それは、私たち教師は子供たちに精一杯の愛情を注ぎますが、どんなに頑張っても両親が注がれる愛情にはかなわないということです。私たちが書いた子供たち一人一人の名前をラブレターと言えるのでしょうか。さすがにそれはできないことでしょう。このCMが胸に迫るのは、それを繰り返し繰り返し思いを込めながら母親が記してきたことが伝わるからなのです。子育ての経験がある私たちは、自分のことと重ねて考えるからなのです。親にしかわからない感情です。

こんなことを考えていたら浮かんできた言葉があります。それは、「親ばか」という言葉です。いいCMについて書いた後の言葉としてあまりふさわしくありませんが、続きがありますので話を進めます。この言葉、一般的には良くない意味で使われるものだと思います。しかし、親が自分の子どものために「ばか」になることが、そんなに悪いことでしょうか。「ばか」という言葉を「一生懸命」と考えれば、私は、決して悪いことではないと思います。親は、自分の子どもに対してそのくらいの愛情をもって当然だと思います。むしろ、親が子どものために「ばか(一生懸命)」にならずして、誰が「ばか」になれるでしょうか。そう考えると上のCMの話と重なる部分もあると感じたのです。

当然お分かりのように、世間で使われている「親ばか」は、その愛情がすべて「甘やかし」として表れている場合に使われているので、良くない意味となっています。本当に愛情がある親は、自分の子どもに対して、親にしかできないと思われるくらい厳しく躾ける場面が当然あるはずです。それも含めて「親ばか」と考えれば、私は、決して悪いことではないと考えているのです。

子供を許容する部分と厳しくする部分において、私たち教師は親には到底及ばない部分があるのだということを、親を経験した立場として痛感します。

私たちは、このような深い愛情が注がれている子供たちを日々目の前にしながら教育活動を進めています。目の前にいる子供たち一人一人に、ご両親と同じ深い愛情を注ぐことは無理だとしても、それに近いような思いで、子どもたちを可愛がったり、厳しく指導をしたりしていきたい。それもまた難しいことならば、せめてご両親の深い愛情に思いを馳せながら日々の教育活動を進めていきたい。

今回の学校便りは、こんなことを思う機会になりました。